

5

ハンター兄弟による18世紀ロンドンの解剖学私塾

—イギリス医学教育史の一場面—

土屋江里子, 坂井 建雄

順天堂大学

18世紀のイギリスでは外科医は職人であり、理髪師外科医連合組合というギルドの規則に基づき7年間の徒弟修行を通じて養成されていたが、徐々にその制度が緩和され病院で研修する者や解剖学私塾で学ぶ者が出てきた。その中でもHunter兄弟の私塾は18世紀の解剖学私塾を代表するものである。当時は宗教的理由などで人体解剖において根強い偏見がもたれていた中で、William Hunter（以下William）が始め弟のJohn Hunter（以下John）が講師を勤めた私塾の講義方式は「パリ方式」と呼ばれる。これは、学生が実際に死体の解剖実習を行いながら人体について学ぶ方式をとり、解剖学の発展、外科技術の向上に貢献した。

Williamはエジンバラ大学で解剖学を学んだ後、1743年にフランスのパリへ解剖学を学ぶために留学をしてAntoine Ferreinが行っていた解剖学私塾に学んだ。当時パリの私塾では学生が実際に死体を解剖し、講師と質疑応答を繰り返しながら人体構造や外科手術を学ぶ講義方式が主流であった。

Williamは1745年にイギリスに帰国後ロンドンのコヴェント・ガーデンで解剖学私塾を「パリ方式」で開校した。弟のJohnはWilliamにスコットランドから呼ばれ、この教室で解剖学助手として働き始める。Williamの私塾は「パリ方式」の講義に加え、Johnが高い解剖学技術で制作した精巧な標本による解説で大変な人気を博した。Williamの私塾は後にグレートウインドミルストリートに移設され、1783年にWilliamは死去するまでの37年間にわたり教鞭をとり続けた。Johnは1748年から1760年までの12年間、Williamの教室で講師を務め、その後軍の外科医になったのち、1772年にロンドンで自身の解剖学私塾を開いた。その私塾はJohnが1793年に亡くなるまで続いている。

解剖学の貢献に果たしたWilliamとJohnの相違を整理すると、まずWilliamは解剖学私塾の成功を収めつつ、外科医・産科医としての技術も評価されシャーロット王妃の侍医に任命されるなど上流階級の患者を多く見るようになる。そして1756年には当時外科医よりも社会的地位の高い内科医として内科医協会から認められた。1763年に国立解剖学校の設立計画をビュート伯爵に懇願したが実現しなかった。しかし彼の死後、解剖学校を引き継いだCharles BellやHervert Mayoがロンドン大学やキングスカレッジなどの国立大学での医学教育の創設にあたり重要な地位に付き、解剖学を大学医学教育の基礎に導いた。

一方、Johnが開いた私塾では、解剖のみならず生理学からも人体を理解し、病理学に至る内容までを教えた。この私塾はEdward Jennerなど、その後の医学に多大な貢献を残した研究者を輩出することとなる。JohnはWilliamと異なり、ジョージIII世の特命外科医に任じられるなど実質的に能力のある外科医としての働きが認められ、外科医の地位向上に寄与している。

ハンター兄弟は、時代を読み社会的向上心に溢れ、上流階級へと上り詰めた兄と、科学としての医学に純粹に取り組む弟が相互に補完し合うことで、医学のみならず医学教育の発展に寄与したことが明らかになった。